ま

ゆかりの地でたどる

かなもりながちかこう
金森長近公 の あゆみ

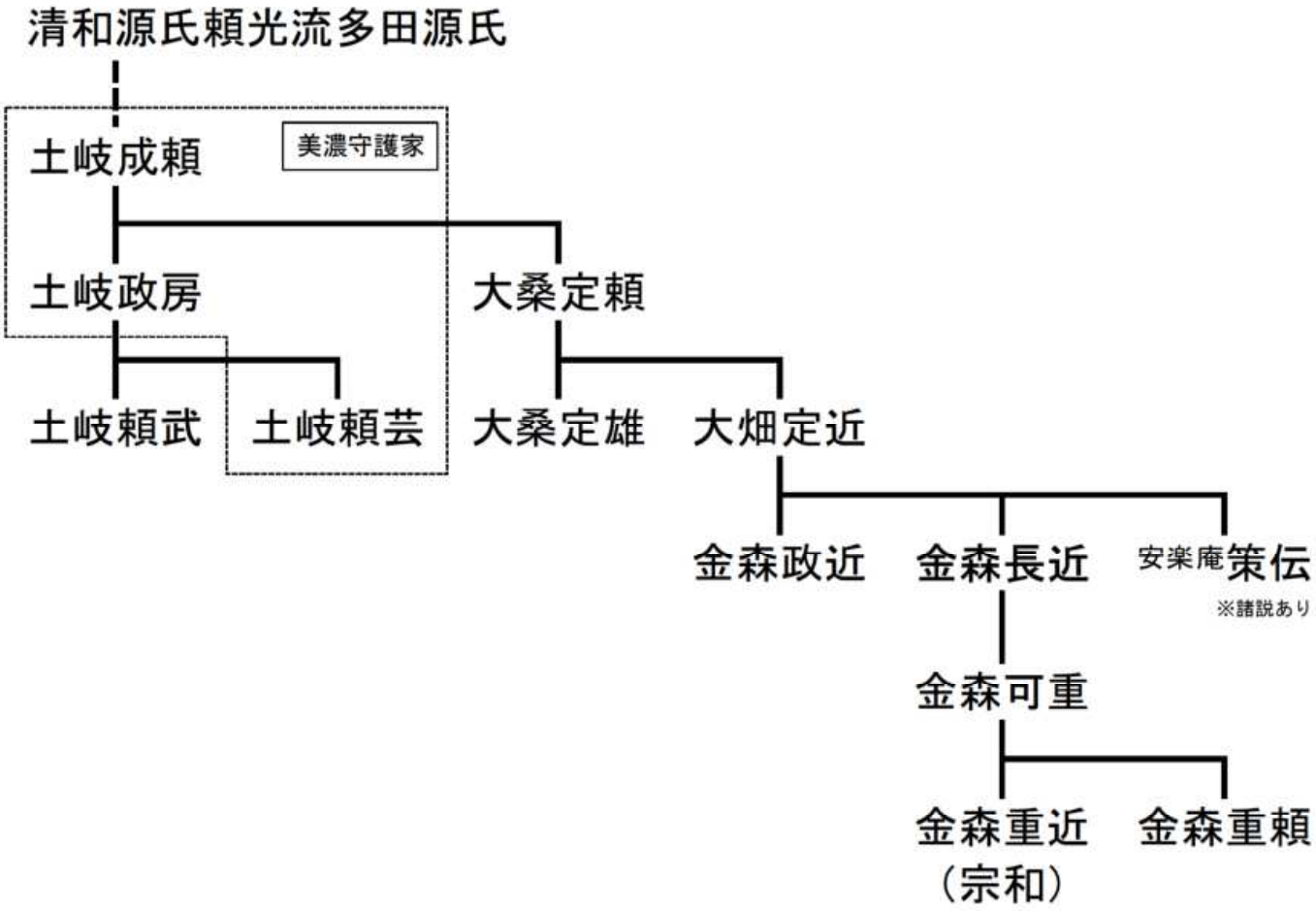


金森長近公肖像画（金森左京家蔵（越前大野城内展示））

生誕：大永４年（1524）
死没：慶長１３年８月１２日（1608 年 9 月 20 日）
改名：可近（初名）→長近→素玄（法号）
別名：五郎八（通称）

ち

略系図



名字について

系図に「土岐」「大桑」「大畑」「金森」と４つの名字が出てきますが、名字は「所領としている土地（本貫地＝名）」を意味しています。つまり、「金森長近」は、「金森の地を所領している、または出身などゆかりがある長近」という意味です。ちなみに、ここに登場する人たちの「氏」はすべて「源」です。



づ

美濃国土岐郡大畑村（岐阜県多治見市）

大永４年（1524）、長近公は、大畑定近の次男として、美濃国大畑村で誕生しました。

美濃国では、永正１４年（1517）、美濃守護の土岐政房が嫡男・頼武を差し置いて次男・頼芸を推したことから家督争いが起こりました。この戦は美濃国内を分断させたばかりか、越前朝倉氏と近江浅井氏が各陣営を支援したことから、大きな混乱に発展しました。



近江国野洲郡金森（滋賀県守山市）

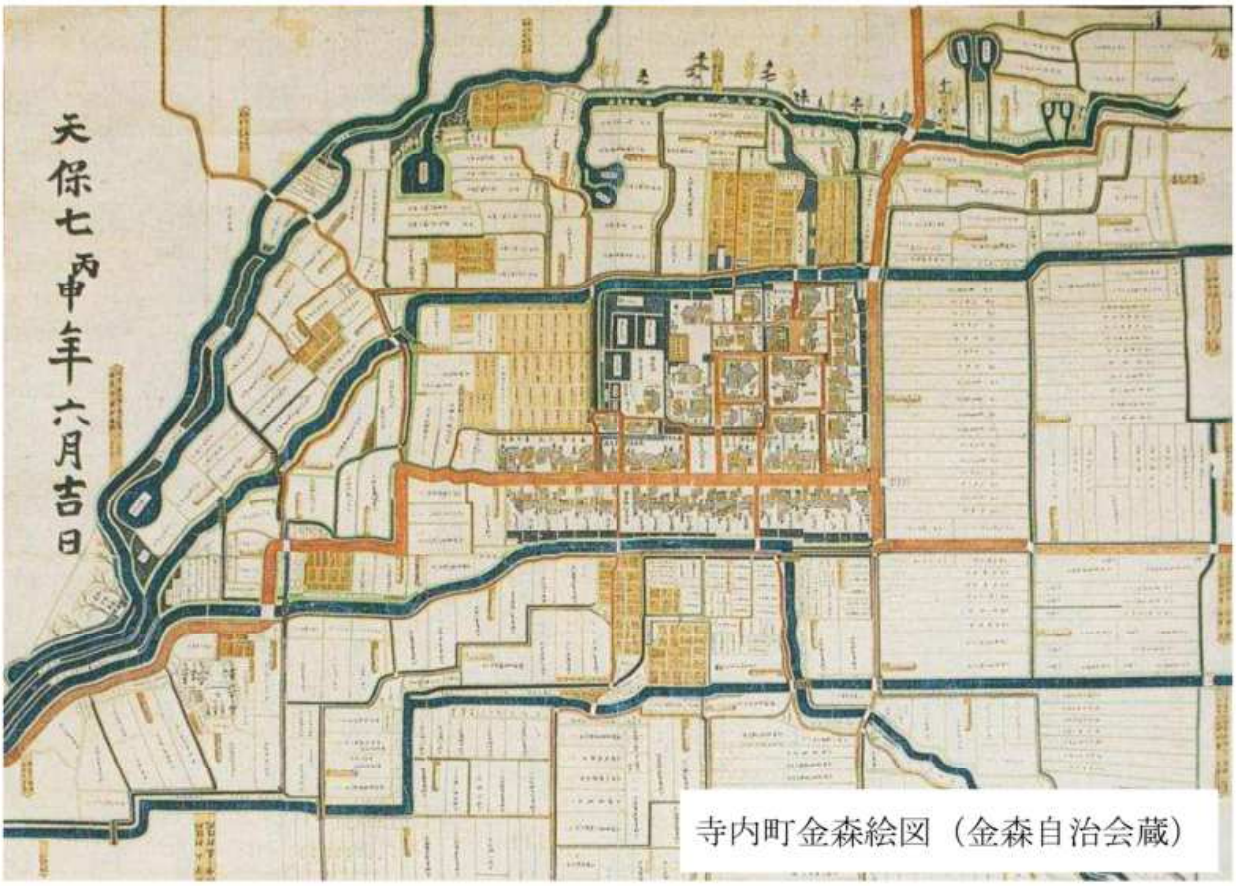
長近公は幼いころ、父・大畑定近が支持した土岐頼武が失脚したため、近江国野洲郡金森（以下、近江金森）へ移住したといわれています。

近江金森は、東山道から琵琶湖の志那浦へ通じる志那街道（比叡山への輸送路）が通っていたことから、古くから宿駅として発展していました。また、領主・川那辺矩厚（道西）によって金森惣道場（金森御坊）を中心とした寺内町（計画都市）が整備されていました。

計画都市と街道を組み合わせて経済を活性化させる方法は、長近公のまちづくりに大きな影響を与えたと考えられます。

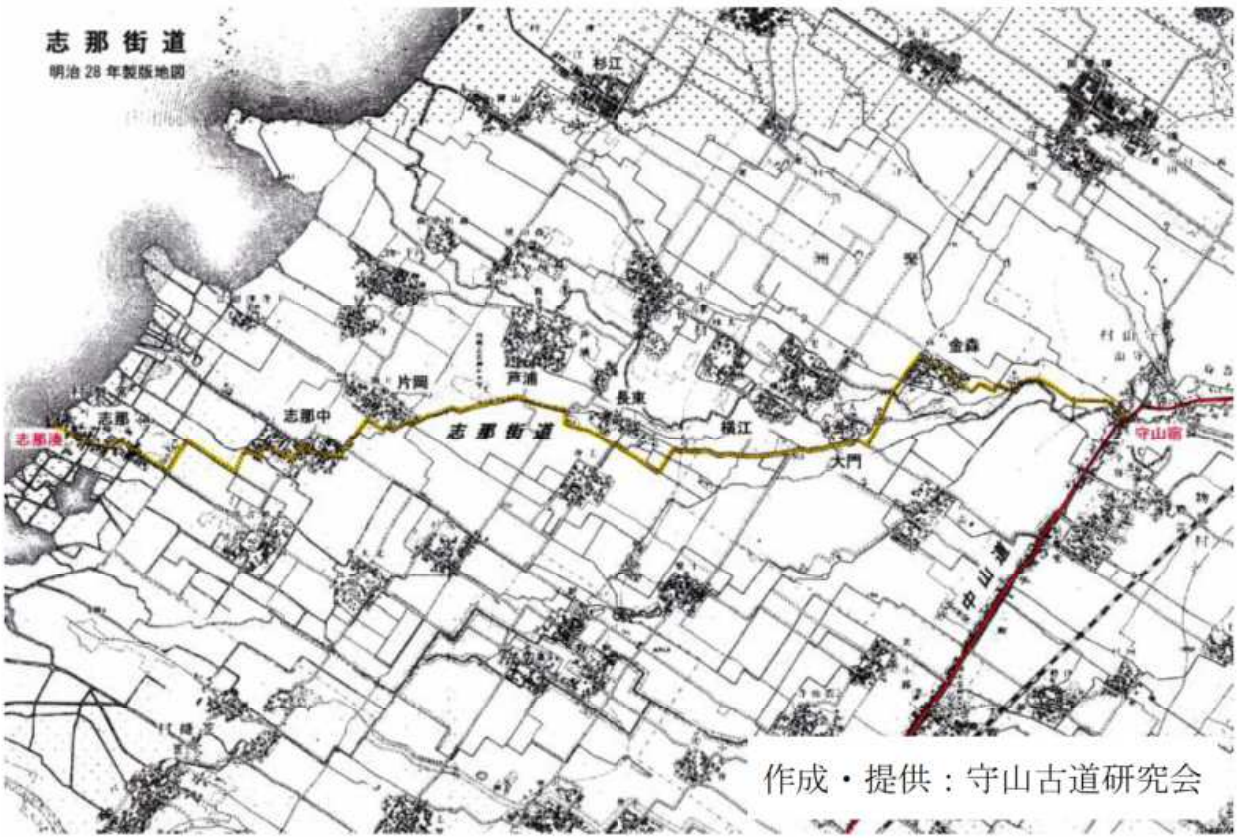
り

寺内町（じないちょう）として発展（はってん）した近江金森（おうみかねがもり）



寺内町金森絵図（金森自治会蔵）

近江金森（おうみかねがもり）を横断（おうだん）する志那街道（しなかいどう）



作成・提供：守山古道研究会

の

尾張時代

天文１０年（1541）、長近公は尾張国の織田信秀に仕官し、跡を継いだ信長にも仕えました。長近公は信長の親衛隊ともいえる「赤母衣衆」に抜擢されています。それまでは可近と名乗っていましたが、数々の軍功により信長から「長」の字を使うことを許され、長近と名を変えました。



め

越前国大野郡（福井県大野市）

天正３年（1575）８月、信長による越前一向一揆鎮圧の際、長近公は奥美濃から温見峠を越えて大野郡に入り、わずかな期間で平定しました。

この功績として大野郡の３分の２を与えられた長近公は、亀山とその東麓に城郭を築き、さらに東に城下町を整備しました。



大野城石垣幷長屋門破損之覚図（名古屋市蓬左文庫蔵）

い

越前国大野郡（福井県大野市）

長近公は城下町を「ヨコ町型」（街の区割りや主要街道、職人町といった町通りが、城郭に対して横向きに整備されている城下町）に整備しています。これは商工業の発展を促すもので、戦国時代としては、かなり先進的なまちづくりの取り組みです。



じ

大野市の取り組み

文化財の保存と活用について、「大野市文化財保存活用地域計画」（文化庁認定）では、「大野城の築城と城下町の形成、その後の発展」を大きな柱の一つとしています。

これからも、越前大野城や城下町、関係する場所や歴史資料などを積極的に活用することで、「人づくり・まちづくり」を進めていきます。

大野市の歴史文化の特徴（大野市文化財保存活用地域計画より）

人と地域がつなぐ「交流の文化」
1　原始・古代の人々の営み
2　町や村に暮らす人々の交流
3　華開く「進取の気象」

戦時の城から泰平の大野へ「城・城下町の文化」
4　戦乱の時代と大野盆地の城郭群
5　**大野城の築城と城下町の形成、その後の発展**

今も息づく「祈りと祭りの文化」
6　地域に息づく多様な信仰形態
7　受け継がれる芸能

自然と共に生きる「暮らしの文化」
8　自然の恵みと暮らし
9　食の営み

大野に残る「太古の記憶」
10　化石が物語る大地の歴史
11　山と盆地の豊かな自然環境



ん

信長死後の長近公

天正１０年（1582）、本能寺の変によって命を落とした信長と金森長則（長近公の長男）の菩提を弔うため、京都の大徳寺に塔頭金龍院を建立しました。

信長の後継者争いは清洲会議を経ても収まらず、北の庄城（今の福井市）の柴田勝家と羽柴（のちの豊臣）秀吉の対立は賤ケ岳の戦いへと発展しました。長近公は勝家側として参戦しましたが、戦況を判断して軍勢を退かせ、勝家の敗戦後に、秀吉に降伏しました。

賤ケ岳の戦い

羽柴軍	柴田軍
羽柴秀吉	柴田勝家
丹羽長秀	織田信孝
織田信雄	前田利家
中川清秀	金森長近
戦力　5万-7万	戦力　3万

飛騨国大野郡高山（岐阜県高山市）

天正１３年（1585）、秀吉の命を受けた長近公は飛騨国の姉小路氏を討ち取り、その戦功として飛騨一国を与えられ、飛騨国主として高山の鍋山城を拠点にしました。

天正１８年（1590）に高山城の築城に着手し、慶長１０年(1605)ごろに完成しました。天守は江戸時代に取り壊されましたが、建物が東山寺院群などに移築され、日本遺産「飛騨匠の技・こころ」の構成文化財になっています。

高山の城下町は武家地より町人地の方が広く、大野と同様、商工業を重視したことがわかります。面影を残すこの町並は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

な

高山城推定復元図（たかやまじょうすいていふくげんず）



飛騨高山まちの博物館所蔵

重要伝統的建造物群保存地区

高山市三町伝統的建造物群保存地区（たかやましさんまちでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく）



飛騨高山まちの博物館提供

関ケ原の戦いと長近公

豊臣秀吉の死後、徳川家康と旧豊臣家家臣との間で関ケ原の戦いが起きると、長近公は徳川軍（東軍）として参加しました。長近公は当時７６歳と高齢でしたが、美濃郡上八幡城攻め（八幡城の合戦）などで活躍しました。こうした戦功により、美濃国武儀郡（岐阜県美濃市、関市など）と河内国金田（堺市北区金岡町）が領地に追加されました。





結果、長近公は
織田信長
豊臣秀吉
徳川家康
の三英傑に仕えました。



り

美濃国武儀郡上有知（岐阜県美濃市）

慶長１０年（1605）、８０歳を越えた長近公は、飛騨一国と高山城を養子の可重に任せ、自身は上有知の鉈尾山城に入り、さらに小倉山城を築いて移りました。

長近公は上有知でも、領内の産業を活性化しました。紙・茶・雨傘・養蚕・生糸・織物などを奨励しましたが、特に製紙業に注目しました。紙専門の六斎市を開き、長良川沿いに川湊「上有知湊」を築いて流通・交通の要所としました。美濃和紙の集散地となった上有知は栄え、のちに城下町から和紙中心の商業町へと転換していきました。現在は、「うだつの上がる町並み」として重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

な

上有知湊跡に建つ灯台



美濃市提供

大野市結ステーション中央に建つシンボルモニュメント「時鐘」は、上有知の川湊灯台をモデルにしています。

重要伝統的建造物群保存地区

うだつの上がる町並み



美濃市提供

が

長近公の死

慶長１３年（1608）８月１２日、京都伏見で亡くなりました。享年８５歳でした。

【菩提所】

素玄寺（岐阜県高山市）

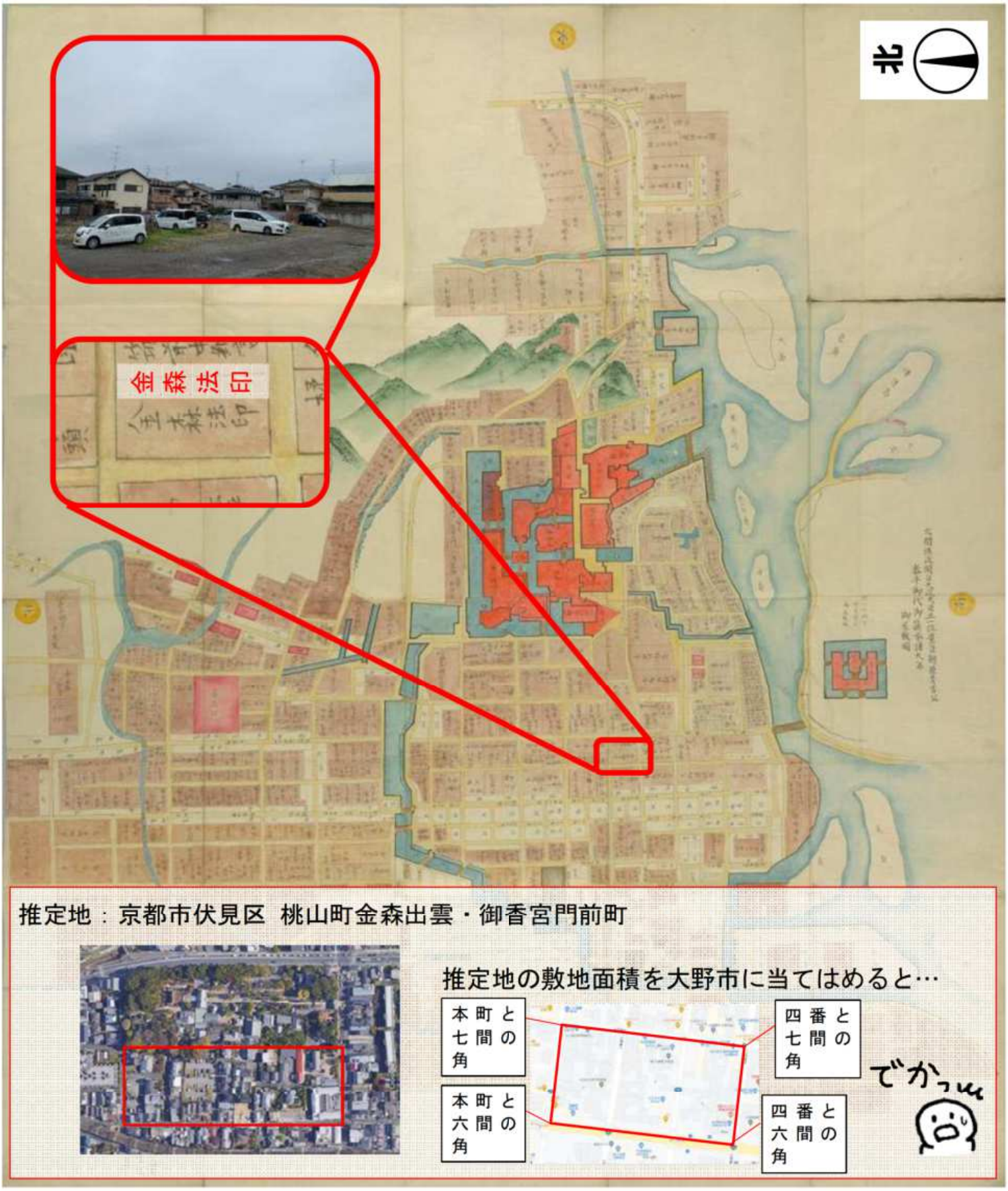
のち、大徳寺塔頭の金龍院（京都府京都市）に改葬。同院の廃寺により大徳寺塔頭の龍源院（同所）に再び改葬。



素玄寺（高山市）

ち

伏見城下（ふしみじょうか）の金森屋敷（かなもりやしき）



推定地：京都市伏見区 桃山町金森出雲・御香宮門前町

推定地の敷地面積を大野市に当てはめると…

でかっ

『伏見桃山御殿御城之画図』, 写, 明治 14. 国立国会図書館デジタルコレクション

か

長近公（ながちかこう）の 足跡（あしあと）



